

STYLING

Vol.82
ASAHI SHOES
SINCE 1892~

●【アサヒシューズ】

Photo / Nariaki Imamura
Tomoaki Tsuruda(WPP)
Asahi Corporation
Text / Teruhiko Doi(WPP)

MONO



下のステュードベーカーの写真は
大正元年から始まった「志まや」の
宣伝カー。同社から後のブリヂストンが
誕生することを予感させるような一枚。
写真提供 / アサヒシューズ



19世紀末の日本は明治時代。一般人の装いは草鞋や足袋という、着物スタイルの履物が中心だった。1892年、福岡県久留米市で創業した仕立物屋の「志まや」は、足袋の販売で社業を伸ばし、その後、履物史上の革命である貼り付け式地下足袋「アサヒ特許地下足袋」を発売。考案したのは創業者石橋徳次郎の二人の息子の弟の方、石橋正二郎であった。正二郎はその後、同社内にタイヤ部を創設して後のブリヂストン・タイヤに発展。一方、兄の二代目徳次郎は社名を「日本ゴム」に改め、地下足袋製造と並行して需要が高まってきた学童用上履きに代表されるゴム底靴の製造も開始。ゴム底と布製の靴本体を接着し大きな釜で熱と圧力をかける靴の製造法であるバルカナイズ製法によって品質と生産力の向上を図り同社の「アサヒ靴」は業界トップのブランドになる。21世紀のいまも天然ゴムからバルカナイズ製法で質のいい靴を作り続けている久留米の名門、「アサヒシューズ」の魅力を探って行くことにしよう。

MONO



ゴムの加硫法とバルカナイズ製法を考案したチャールズ・グッドイヤー。バルカナイズはスニーカーの基本的製造法として広まったが、チャールズの息子も発明家気質があり、革靴で有名なグッドイヤーウェルテッド製法を考案。考えてみれば、靴に縁の深い親子である。

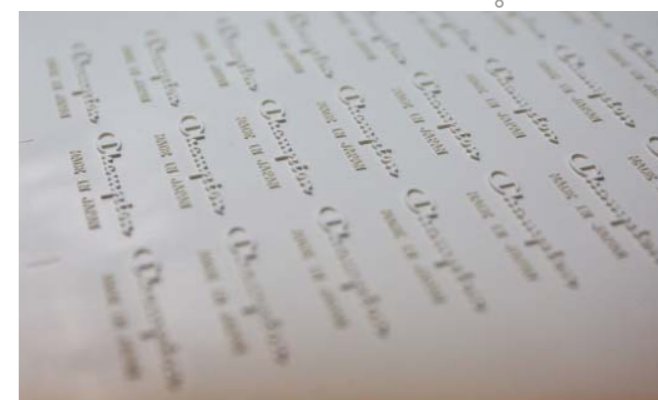
キング・オブ・スウェットシャツで知られるアメリカのオーセンティックブランド「チャンピオン」のシューズ製造を手掛けているのはアサヒシューズ。ライセンス生産にありがちなイメージ先行の製品ではなく



きちんとチャンピオンの哲学を理解したモノ作りが素晴らしい。アッパーの生地には和歌山産の裏毛パイル空スウェットを始め、日本各地の伝統素材を採用。メイドインジャパンの品質とUSAオーセンティックブランドの商品として完成度は高い。



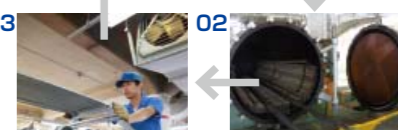
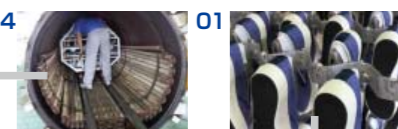
和歌山県紀州地区でシューズ用として編まれたスウェット生地、裏毛パイル空スウェットをアッパーに採用した「パーモントSO」モデル。裏毛パイルとグレー空にこだわった厚手の素材は、足を通しただけでその履き心地の良さを実感できる。



チャンピオンフットウェア製造現場に潜入！

19世紀に考案され、産業革命を代表する技術のひとつとして知られるゴムの加硫製法。その加硫釜がいまも現役で働いている様子を見るのは感動的。久留木の工場、モノ作りの原点を再発見した。

これが加硫釜だ!!



05

06

04

07

01

02

アサヒシューズ久留木工場でも現役として稼働している加硫釜(缶)。蒸気の温度や圧力など微妙なレンジは企業秘密。①加硫前のシューズ。すでに靴の形をしているがゴムの部分は生ゴムのまま。②扉が開けられた巨大な加硫釜。③シューズが吊るされたコンテナを加硫釜の中にセットする。④内部で作業している人間との比較で加硫釜の大きさが判るだろうか?⑤約1時間の加硫工

程を終えて、加硫釜の扉をオープン。製品の形状やゴムの質などによって加硫の時間は細かく変わってくる。⑥高温の蒸気と圧力で熱々になったシューズを扇風機で冷却。⑦製造されたのはチャンピオンの2015秋・冬コレクションで発表された新作だった。工場内の各ラインは熟練の職人と若い職人がセットで作業。日本の製造業の明るい未来を示唆しているような光景だった。

MONO

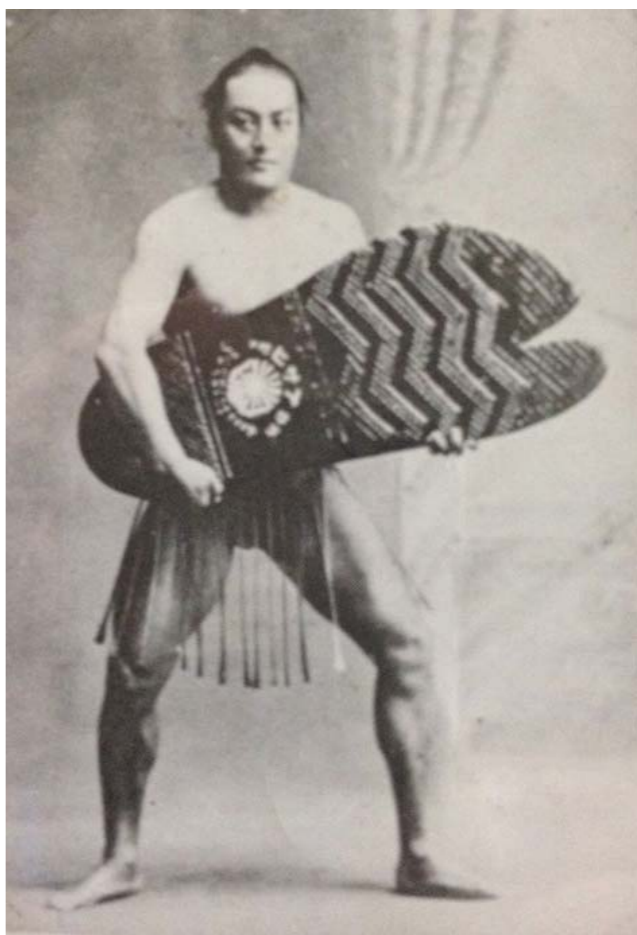


プリヂストンの社名は、創業者石橋正二郎の石橋姓を英語表記したものだ。ただ、ストーン・ブリッジでは語呂が悪いのでプリヂストンにした、と言われている。

地下足袋に学校の上履き、そして現代は快歩主義。日の出マークのアサヒシューズで日本人は大きくなった。

ゴムの原料であるゴムの木の樹液。しかし、この樹液を集めて成型しても製品にはならない。ゴムは、加硫、という硫黄などの成分を加えて加熱することで、初めてゴム製品の原料となるのである。特にシューズの進化における加硫ゴムの影響は大きく、このゴムを使った「バルカナイズ製法」で、世界中に現代へと続く多くの靴ブランドが誕生した。

一方、日本のゴム産業は福岡県の久留米市で隆盛を迎えた。履物史上に残るアイデアといわれる貼り付け式地下足袋「アサヒ特許地下足袋」を、久留米の「日本足袋株式会社」が開発・製造販売を



始めてからである。同社は現在の「アサヒシューズ」の前身である。同社の創業は明治25年（1892年）。初代石橋徳次郎が久留米市におい

て仕立物業「志まや」を立ち上げた。創業当初から二人の息子たちに家業を手伝わせ、やがて長兄の重太郎が二代目徳次郎を襲名。弟の正二郎は家

自動車を購入し、宣伝カーとして利用。大正3年（1914年）には商標の「波に朝日」マークを採用した「アサヒ足袋」を20銭均一で販売。サイズに



①三池炭鉱に持ち込んだ地下足袋の最初の試作品。基本的な構造は全然変わっていない。
②明治時代に作られていた足袋。金ハゼに「志まや」のマーク。
③昭和三十二年製造のアサヒ地下足袋。
④昭和三十二年製造の編み上げ靴。日本のワークブーツだ！

業の足袋作りを合理的に専門化することに奔走し、まだ徒弟制度が色濃く残っていた産業の現場に給料制や労働時間の概念を植え付け、生産能力を上げることに成功させた。宣伝方法も独特で、まだ国内に500台程度しか普及していなかった輸入

よって価格が異なっていた当時の市場に大きなインパクトを与え、販路を全国へと広げる足掛かりとした。驚くことに、これだけのビジネス展開をしながら同社は当時まだ個人商店だった。「日本足袋株式会社」という会社組織になったのは大正7

年（1918年）のこと。この頃の労働者の履物はほとんどが昔ながらの草鞋。石橋正二郎はこの原始的で非効率な履物の改良に着手し、初めて布製の足袋にゴムを貼り付ける方法を考案した。翌年には試作品を三池炭鉱に持ち込み、炭鉱労働者から高い評価を得て製品化への自信を深める。そして大正12年（1923年）に実用新案を出願した「アサヒ特許地下足袋」を発売。地下で働く炭鉱労働者に敬意を表して「地下足袋」という名になったという。当時の地下足袋を見ると、厚手の生地、黒いゴム底、タイヤのトレッドパターンのような滑り止め模様がある、いま見ると非常にモダンなデザインだった。同社の地下足袋は、昭和初期になってようやく日本にも訪れた、産業革命化された製造現場において爆発的な売れ行きとなる。



チャンピオン・ブランドのシューズに採用されるゴムはADS(エア ドライド シート)と呼ばれる天然ゴムを主体にしたアサヒオリジナル配合ゴム。クッション性など、ゴムそのものの特性に天然ゴムの方が長けているという理由だそうだ。

同時に、農業の現場でも地下足袋姿の農作業風景は当たり前前の光景となった。やがて三代目社長となった石橋正二郎は、世の中の急激な変化を感じ取り、社内にタイヤ部門を設立。来るべきモータリゼーションを予測してのことだった。ゴムを契機に、久留米に根付いた地下足袋製造からタイヤ製造へと躍進を果たしたのである。ちなみに、タイヤ部門が後に独立してプリヂストンとなるのは有名な話。関東に拠点を移した際、武蔵野の田舎に工場を建て、多くの労働者が従事するようになって、そこが東にある久留米、つまり現在の東久留米市になったというわけである。



左はオリジナルゴム生地を作るためのゴム練りを行う職人。右は懐かしい学校上履き。インジェクション方式で製造。

社に変更。当時の主力商品であった「アサヒ靴」は業界トップの知名度と売り上げを誇っていた。戦後の高度経済成長期、学童たちの学校の上履きがほぼ全国的に定着する。上履きの踵に朝日マークのゴムのロゴが付いていたのを憶えている人も多いだろう。この最も売り上げを伸ばした時期の靴製造法が「バルカナイズ」製法。やがて、単純な構造の学童靴や長靴などはインジェクション方式でさらに大量生産が可能となる。1988年（昭和63年）には社名を「株式会社アサヒコーポレーション」に変更。2000

年（平成12年）には純国産を標榜して大ヒットした「快歩主義」を発売。同モデルは今年3月期までに700万足を達成している。2006年（平成18年）には、膝のトラブルを予防する「アサヒメディカルウォーク」を発売。高齢化が進む国内において現在も需要が高まっている。前ページで紹介しているチャンピオン、フットウェアなど、ファッション業界での評価が高い製品も数多く発表。日本の産業革命をいち早く推進した名門ブランドなのである。

チャンピオンとアサヒシューズ。実は両ブランドとも、スクール需要で知名度が高くなったという共通点があることに気が付いた。学校は流行の発信地だ。



アサヒ・メディカルウォークは現在までの累計販売数が100万足というヒット商品。

快歩主義は発売以来、累計販売数700万足を超える大ヒット商品。



九州新幹線の開業に合わせて古い社屋の外装はリフォームされてしまったが、建物内には昭和初期に設置された手動式のエレベーターが、階数表示の数字が、見事にアールデコ。同時代に作られたニューヨークのエンパイアステートビルにの昔のエレベーターも、同じような書体が使われていた。

アサヒシューズはいま……



農業の現場において草鞋や布製の足袋は作業効率が上がらずしかも危険だったので、地下足袋は一気に普及した。古き良き日本の農村を思い出す、懐かしいポスター。

STYLING

MONO



アサヒシューズ、チャンピオン・フットウェアに関するお問い合わせは
 ●アサヒコーポレーション コールセンター
 ☎0120-48-1192
<http://www.asahi-shoes.co.jp>
 ●チャンピオン公式サイト
<http://www.championusa.jp/>



←福岡県久留米市で明治25年に創業した「志まや」の社屋。

←現在のアサヒコーポレーション入口。



バーモントSO(グレー)/和歌山産裏毛パイル糸スウェットをアッパーに採用したスリッポン・シューズ。価格8640円。



バーモントSO(カモフラ)/こちらもスウェット地。他のデザインには素材にポリエステルやキャンバスなどを使ったものもある。価格8640円。



ロチェスターSL(グレー)/スウェットと天然皮革ペロアを採用。底材はEVAスポンジ/ラバーなのでバルカナイス製法ではない。価格1万2960円



バージニアMD(ブラックカモフラ)/ウール・キャンバス(スウェット)を採用したモデル。他にブラウン、チャコール、ブラックがある。価格1万800円。(9月発売予定)



オレゴンHI(ブラックカモフラ)/進化した地下足袋を連想させるアウトドライクなデザイン。レッドとグレーのカラーもあり。価格1万6200円。(9月発売予定)



ミシガンHI(ネイビー)/ウール・キャンバス(スウェット)、人工皮革を組み合わせたバスケットスニーカー。チャコールもあり。価格1万9440円。(9月発売予定)



バーモントSO(上:ブルー、下:チャコール)/2015秋冬で発表された新色は全4カラー。他にブラック/ホワイト、ブラックカモフラ。価格8640円。
 アウトソールは全面に波型の細かな溝が。これはカッティングソールと呼ばれるデザインで、路面でのグリップ機能が高まっている。



ロチェスターRN(イエロー)/2015秋冬の新作。ペロア、ウール、ポリエステル、キャンバス(スウェット)の組合せ。価格1万6200円。(8月発売予定)